

すな ご だ いち
富山市砂子田 I 遺跡
発掘調査報告書

—砂子田地内宅地造成工事に伴う発掘調査報告—

2005

富山市教育委員会

すなごだいち
富山市砂子田 I 遺跡
発掘調査報告書

—砂子田地内宅地造成工事に伴う発掘調査報告—

2005

富山市教育委員会

例 言

- 本書は、富山県富山市婦中町砂子田地内に所在する砂子田Ⅰ遺跡の発掘調査報告書である。
- 発掘調査は、株式会社グリーンステージが行う宅地造成工事に先立ち、富山市教育委員会の監理のもと山武考古学研究所が実施した。
- 調査面積・期間・担当者は次のとおりである。

調査面積	398m ²
発掘期間	平成17年5月11日～平成17年5月24日
調査担当者	桐谷 優・黒岩 拓也（山武考古学研究所）
- 本書の執筆はⅠ、Ⅱ-2・3、Ⅲ、Ⅴを黒岩・桐谷、Ⅱ-1を古川知明（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）が行い、各々の責は文末に記した。
- 自然科学分析については、株式会社グリーンステージが行い、その報告をIV章に収録した。
- 本調査にかかる図面・写真・出土遺物等の資料は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターで保管している。
- 現地調査から報告書作成に至るまで、次の方々・機関の指導・助言・協力を得た。記して謝意を表します。
㈲富山市シルバー人材センター婦中支所、㈱日本テクニカルセンター、㈲新成田総合社

凡 例

- 図で使用する方位は真北、水平基準は海拔高、経緯度の数値は世界測地系である。
- 遺構の略号は、次のとおりである。

SI：住居跡	SK：土坑	SP：柱穴	SD：溝
--------	-------	-------	------
- 平面図及び写真図版の遺物番号は、出土遺物実測図の番号と一致する。
- 土層説明は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖 2001年版」による。
- 遺構・遺物実測図中で使用したスクリーントーンは、以下のとおりである。



目 次

例言 凡例 目次

I 遺跡の位置と概観	1
II 調査に至る経緯と経過	3
1. 調査に至る経緯	3
2. 調査の経過	3
3. 座標軸の設定と調査方法	3
III 調査の概要	5
1. 基本層序	5
2. 遺構	5
3. 遺物	9
IV 自然科学分析	10
V 総括	12
写真図版	

I 遺跡の位置と概観

砂子田Ⅰ遺跡は、富山市の中心部から南西へ約7kmの富山市婦中町砂子田地内に所在し、神通川と井田川に挟まれた標高約15mの扇状地に立地する。遺跡の地目は主に水田や畑地であり、处处に激しい湧水が見られる。遺跡の範囲は南東から北西へ長く広がり、その面積は約14,000m²と広範である。

本遺跡から南東へ1.3km地点には、稚児舞（国重要無形民俗文化財）で有名な熊野神社（表1 No.2）が存在している。この神社は旧婦負郡に7つある式内社に該当する可能性があり、伝承によると、もともと佐伯有頼が立山を開いて祭神を熊野大権現とし、以後、熊野神社と称して来迎寺の僧が奉仕していた。久寿二年（1155年）、立山麓の五智山円福寺が光明坊の時萩島に移り、為成郷十七ヶ村の總社となった。歴代の住僧が熊野神社の別当職として奉仕し、光明山来迎寺と寺号を改めた後、富山市に移った。この熊野神社を取り囲む様にして、神通川左岸の微高地には、古墳時代以降の遺跡が点在している（婦中町教委 2004）。

これまで砂子田Ⅰ遺跡では、平成12年度の（財）富山県文化振興財團による公害防除特別土地改良事業に伴う発掘調査を契機に、平成14・15年度に町道新設、平成16・17年度に宅地造成工事に伴う調査が行われた（婦中町教委 2004、2005）。

平成12年度の調査では、堅穴住居跡3棟、柱穴、溝、土坑、集石遺構等が検出された。堅穴住居跡からは6世紀後半、他の遺構からは7世紀代の遺物が出土しており、当地区が古墳時代から古代にかけての集落であることが確認されている。平成14・15年度の調査では、7世紀後半～8世紀後半の遺物を伴う掘立柱建物1棟、溝、土坑等が検出された。その他、中世の土器、近世の畔群や噴砂が検出されている。平成16年度の調査では、堅穴住居跡4棟、溝、土坑、柱穴等が検出された。出土遺物から8世紀～9世紀代に中心を持つ遺構群と考えられ、住居跡は3棟が8世紀後半、1棟は9世紀後半の所産である。出土遺物は8世紀～9世紀代の土師器、須恵器が大部分であり、その中に墨書き15点、刻書き1点、円面鏡1点が見られる。

（黒岩）

表1 周辺の遺跡一覧

No	遺跡名称	種別	時代	No	遺跡名称	種別	時代
1	砂子田Ⅰ遺跡	集落	古墳・古代(奈良・平安)・中世	10	鬼Ⅰ遺跡	墓	中世(鎌倉・室町)・近世
2	熊野神社			11	清水島Ⅱ遺跡	集落	中世(鎌倉・室町・戦国)・近世
3	中名Ⅰ遺跡	集落	古代(平安)・中世(鎌倉・室町・戦国)	12	臼遺跡	散布地	古代
4	中名Ⅱ遺跡	集落	中世(鎌倉・戦国)	13	鶴坂Ⅰ遺跡	集落	古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)・近世
5	中名Ⅴ遺跡	集落	古代・中世(室町・戦国)・近世	14	鶴坂寺跡遺跡	散布地	中世(鎌倉・室町)
6	中名Ⅵ遺跡	集落	古墳・古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町・戦国)・近世	15	宮ヶ島Ⅱ遺跡	散布地	中世・近世
7	道場Ⅰ遺跡	集落	中世(室町・戦国)・近世	16	友坂遺跡	集落・城館	桃文・山代(平安)・中世(鎌倉・室町)・近世
8	道場Ⅱ遺跡	散布地	中世(室町・戦国)・近世				
9	持田Ⅰ遺跡	集落	中世(鎌倉・室町)・近世	17	杉原神社		



第1図 周辺の遺跡分布図 (1/20,000)

II 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯

砂子田1遺跡は、平成6年度に婦中町教育委員会が実施した分布調査で発見された遺跡である。これまで町道建設、県営公害防除特別土地改良事業、宅地造成等民間開発に伴う試掘調査で、弥生末から古墳前期、奈良・平安、中世の遺構・遺物が確認されていた。試掘確認調査の結果、遺跡面積は14,000m²と確定した。

平成16年3月、株式会社グリーンステージにより遺跡範囲内において分譲宅地造成計画が提示された。協議の結果、第1期工事として平成16年度に調整池・道路部分計2,472m²の発掘調査、第2期工事として道路部分398m²の発掘調査が緊急に必要と判断されたため、民間発掘調査機関に委託して発掘調査を実施することで合意した。

平成16年7月、株式会社グリーンステージと町教委とで協定を締結し、同年8月～10月に第1期工事分の現地発掘調査を山武考古学研究所が担当して実施した。

第2期工事分398m²の発掘調査は、平成17年4月合併により富山市となったため、富山市教育委員会埋蔵文化財センターの監理のもと、同じく山武考古学研究所が担当して実施した。

調査は平成17年5月11日から着手し、同年5月24日に完了した。 (古川)

2. 調査の経過

調査は平成17年5月11日～同年5月24日まで実施し、調査経過の概略は以下のとおりである。

11日 調査区域を設定し、施設、発掘器材の搬入を行う。12日 重機による表土除去を開始。13日 人力による包含層掘削、遺構検出作業開始。14日 表土除去終了。16日 公共座標の設置(世界測地系)。15～20日 遺構の掘り下げ、断面・平面実測を実施。24日 施設、発掘器材の撤収を行い、現地調査の全てを終了した。



第2回 調査区と周辺の地形 (1/5,000)

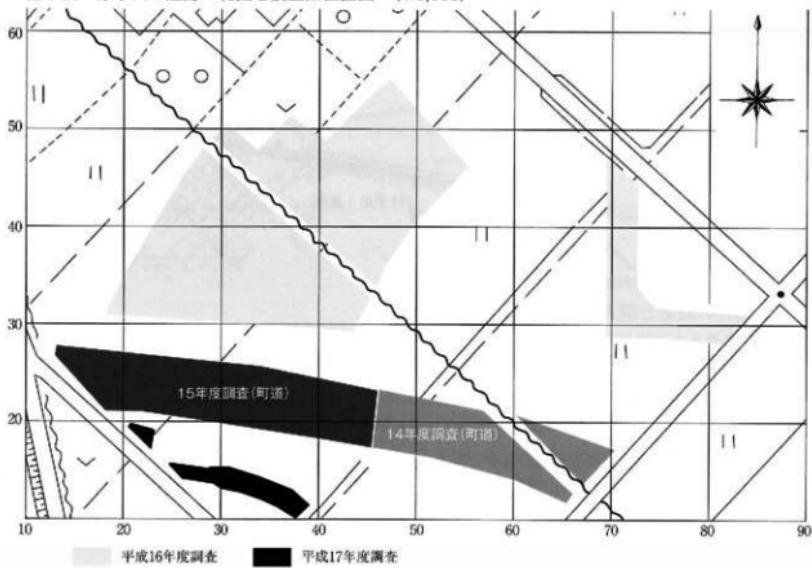
3. 座標軸の設定と調査方法

調査の基準となる座標軸は、平成14～16年度調査区の座標軸を用いて設定した。座標軸は国土地理院設定の第VII座標系公共座標のうち、X=72,400、Y=-850を原点として南北軸をX軸とし、X=0から北方向に進むにしたがってX座標の数値が増える。同様に東西軸をY軸とし、Y=0から東方向に進むにしたがってY座標の数値が増える。1グリッドの区画は2m×2mを1単位とし、調査区の範囲はX=0～20、Y=20～58となる(第6図)。

調査は表土掘削、包含層調査、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、測量(実測)の順で行った。遺構等の実測図の縮尺は1/20を基本として平面図・断面図を作成し、デジタルデータとして記録した。写真撮影は35mmモノクロフィルム、35mmカラースライド、120mmモノクロフィルムを使用して、調査の各段階に応じて撮影を行った。 (黒岩)



第3図 砂子田I遺跡の範囲と調査区位置図 (1/6,000)



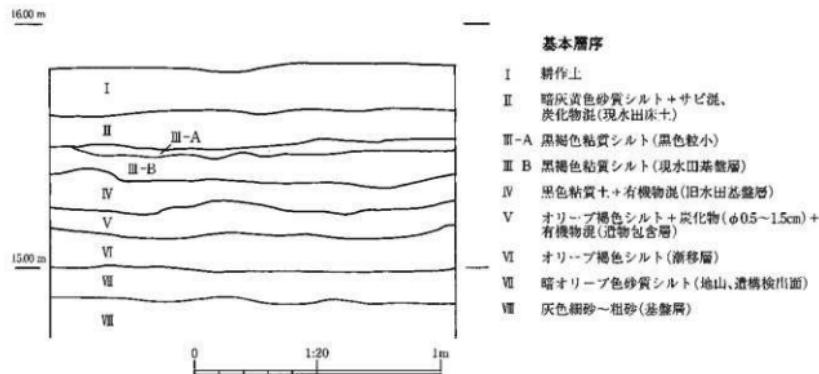
第4図 平成16～17年度調査区位置図 (1/1,000)

III 調査の概要

1. 基本層序

遺跡の基本層序は、平成14～16年度の調査区と概ね同様であり、土層観察は調査区南壁で行った（第5図）。基本的な堆積は上より順に、I層：耕作土（厚19～23cm）、II層：暗灰黄色砂質シルト＋サビ混・炭化物混（厚9～14cm）現水田床土、III層-A：黒褐色粘質シルト（厚9cm）、III層-B：黒褐色粘質シルト（厚9～17cm）現水田基盤層、IV層：黒色粘質土＋有機物混（厚8～14cm）旧水田耕作土、V層：オリーブ褐色シルト＋炭化物（ $\phi 0.5\sim 1.5\text{cm}$ ）+有機物混（厚13.5～20cm）遺物包含層、VI層：オリーブ褐色シルト粘性V層より強（厚4～19cm）漸移層、VII層：暗オリーブ色砂質シルト（厚15～20cm）地山・遺構検出面、VIII層：灰色細砂～粗砂で基盤層となる。V層は調査区域の中央部以東では、ほとんど遺物を含まない。

（黒岩）



第5図 基本層序図

2. 遺構

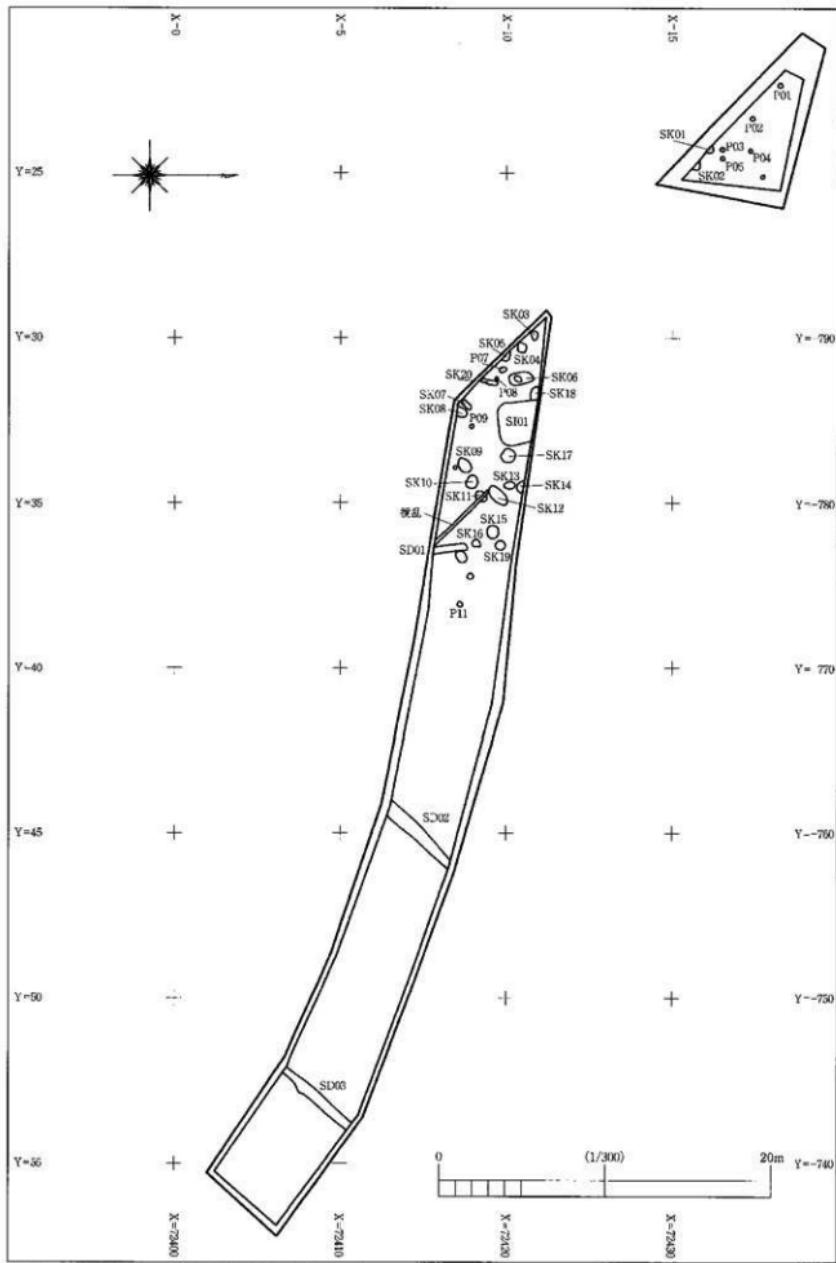
調査の結果、古代の堅穴住居跡1棟、土坑18基、小穴10基、溝3条が検出された。遺構の分布状況は、調査区の中央以西に集中し、それ以東では近代の所産と思われる溝2条が検出された。

A. 古代の遺構

1. 堅穴住居跡

SI01（第7図、図版2）

X 9～11 Y 32～34区に位置し、SK18を切り込んで構築されている。遺構の北部分が調査区外となり全容は不明であるが、その検出状況から堅穴住居跡として取り扱った。平面形は隅丸の方形と考えられ、南北軸は N-8°-W を示す。確認された規模は東西3.85m、南北3.10m 以上、深さ12cmである。カマド・柱穴、壁溝は確認されなかった。覆土は暗灰黄色粘質シルトの単層で、少量の炭化物・焼土粒子を含む。この覆土上から採取された炭化物を用い、AMS法による放射性炭素年代測定を実施し、その結果はIV章の自然科学分析に収録した。遺物は、須恵器杯B(1)・杯B蓋(2)・杯A(3・4)・短頭壺(5)・土師器皿(6)が床面からやや浮いた状態で出土した。



第6図 砂子田1遺跡遺構全体図 (1/300)

2. 上坑

SK01(第7図、図版2)

X 16 Y 24区に位置する。遺構の南側部分が調査区外となり、全容は不明である。規模は東西45cm、南北30cm以上、深さ12cmである。底面は平坦で、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。覆土は2層に分かれ、上層は暗灰黄色粘質シルト、下層は灰オリーブ色シルトである。

SK02(第7図)

X 15 Y 24区に位置し、SK01と隣接する。遺構の南側部分が調査区外となり、全容は不明である。規模は東西58cm、南北35cm以上、深さ14cmである。底面は平坦で、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。覆土はSK01と近似し、2層に分かれれる。

SK03(第7図、図版2)

X 10 Y 29区に位置する。平面形は不整形で、規模は長軸58cm、短軸40cm、深さ13cmである。覆土は灰オリーブ色シルトの単層である。

SK04(第7図、図版2)

X 10 Y 30区に位置する。平面形は略方形を呈し、規模は長軸60cm、短軸55cm、深さ14cmである。底面は僅かに起伏し、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は灰色シルトの単層である。

SK05(第7図、図版2)

X 9～11 Y 30区に位置する。遺構の南側部分が調査区外となり、全容は不明である。規模は東西62cm、南北29cm以上、深さ10cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は灰オリーブ色シルトの単層で、少量の炭化物を含む。

SK06(第7図、図版3)

X 10 Y 30区に位置する。平面形は略長方形を呈し、規模は長軸135cm、短軸72cm、深さ12cmで、底面中央付近に長軸50cm、短軸32cm、深さ3cmの楕円形の小ピットを有する。覆土は灰オリーブ色シルトの単層である。遺物は須恵器壺（7）が出土した。

SK07(第7図、図版3)

X 8 Y 31～32区に位置する。平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸70cm、短軸30cm、深さ8cmである。覆土は灰色シルトの単層である。

SK08(第7図、図版3)

X 8 Y 32区に位置する。遺構の南側部分が調査区外となり、全容は不明である。規模は東西50cm、南北62cm以上、深さ13cmで、底面は僅かに起伏している。覆土は灰色シルトの単層である。

SK09(第8図)

X 8 Y 33～34区に位置する。平面形は略円形を呈し、規模は長軸110cm、短軸78cm、深さ28cmである。底面は起伏し、壁は東側が緩やかに、西側がほぼ垂直に立ち上がる。覆土は上層が黄灰色粘質シルト、下層が灰オリーブ色シルトの2層に分かれれる。遺物は須恵器蓋（8）が出土した。

SK10(第8図、図版3)

X 8～9 Y 34区に位置する。平面形は略円形で、規模は長軸90cm、短軸70cm、深さ19cmである。底面は僅かに起伏し、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は上層が黄灰色粘質シルト、下層が灰オリーブ色シルトの2層に分かれれる。

SK11(第8図、図版3)

X 9 Y 34区に位置し、遺構の中央部を擾乱が切り込んでいる。平面形は略円形で、規模は長軸71cm、短軸65cm、深さ8cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は灰色シルトの単層

である。

SK12(第8図、図版3)

X 9 Y 34~35区に位置する。平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸142cm、短軸70cm、深さ12cmで、南西壁に径25cm、深さ5cmのピットを有する。覆土は上層が黄灰色シルト、下層が灰オリーブ色シルトの2層に分かれれる。

SK13(第8図)

X 9~10 Y 34区に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸70cm、短軸47cm、深さ11cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は灰色シルトの単層である。

SK14(第8図、図版3)

X 10 Y 34区に位置する。遺構の北側部分が調査区外となり、全容は不明である。規模は東西65cm、南北37cm以上、深さ10cmである。覆土は灰色シルトの単層である。

SK15(第8図、図版3)

X 9 Y 35~36区に位置する。平面形は円形を呈し、規模は長軸80cm、短軸78cm、深さ40cmである。底面は平坦で壁は垂直に近い角度で立ち上がる。覆土は上層が黄灰色粘質シルト、下層が灰オリーブ色シルトの2層に分かれれる。

SK16(第8図、図版4)

X 8 Y 36区に位置する。平面形は略方形を呈し、規模は長軸50cm、短軸42cm、深さ8cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は黄灰色粘質シルトの単層である。

SK17(第8図)

X 9~10 Y 33区に位置する。平面形は円形を呈し、規模は長軸90cm、短軸85cm、深さ18cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は灰色シルトの単層である。

SK18(第8図、図版4)

X 10 Y 31区に位置する。遺構の東側部分をSI01に切られ、北側部分が調査区外となり、全容は不明である。規模は東西80cm以上、南北48cm以上、深さ10cmで、覆土は黄灰色粘質シルトの単層である。遺物は須恵器B蓋(9)と土錐(10)が出土した。

SK19(第8図、図版4)

X 9 Y 36区に位置する。平面形は円形を呈し、規模は径60cm、深さ24cmである。覆土は灰色シルトの単層で、地山塊を少量含む。

SK20(第8図)

X 9 Y 31区に位置する。南北に長い溝状の土坑で、規模は長軸98cm、短軸20cm、深さ20cmである。覆土は灰色シルトの単層である。

3. ピット(第8図、表4、図版1~4)

ピットは10基が検出された。その多くは柱穴状であるものの、明瞭な配列を追うことはできなかつた。各ピットの規模等は、表4に取りまとめた。

4. 溝

SD01(第9図、図版4)

X 7~8 Y 36区に位置し、調査区外の南方向へ続いている。方向はN-7°-Wを示し、規模は長さ21m以上、幅40cm、深さ10cmである。覆土は灰色シルトの単層で、炭化物を少量含む。

B. 近世以降の遺構

1. 溝

SD02(第9図)

X 6～8 Y 42～53区に位置し、調査区外の南北方向へ続いている。方向はN-45°-Eを示し、規模は長さ4.95m以上、幅50～90cm、深さ12cmである。覆土は黒色粘質土の単層である。

SD03(第9図、図版4)

X 3～5 Y 52～53区に位置し、調査区外の南北方向へ続いている。方向はN-43°-Eを示し、規模は長さ5.15m以上、幅42～75cm、深さ14cmである。覆土は黒色粘質土の単層である。SD02と方向、規模、覆土が近似していることから、SD02との関連性が想定される。

3. 遺物

(1) 造構出土遺物 (第10図、図版5)

SI01 須恵器杯B(1)・杯B蓋(2)・杯A(3・4)・短頭壺(5)・土師器皿(6)が出土した。1は体部の外傾度が強く、全体的に器壁は薄い。2は内面に墨痕と磨り面が見られる転用碗である。口縁端部を内側に巻き込み、頂部外面は回転ヘラ切り。3は体部の外傾度が強く、底部と体部の境が丸い。4は体部の外傾度が強く、底部と体部の境が角張る。5は口縁部が弱く外傾し、内外面に自然釉が見られる。6是有台皿で、高台は内端で接地し、口縁部に補修痕が観察される。

SK06 7は須恵器壺の肩部片で、外面に自然釉が見られる。

SK09 8は須恵器杯B蓋で、口縁端部を内側に巻き込む。

SK18 杯B蓋(9)・土錘(10)が出土した。9は径1.9cmのボタン状のつまみをもち、頂部外面はヘラ切りの後ロクロナデを施す。10は土師質の管状土錘である。平面形態が隅丸長方形で、側縁部が直線的で円柱状をなし、長さが幅の2倍より短い。

P10 11は土師器壺で、口縁端部を短く内折させ、内外面にヨコナデを施す。

(2) 包含層出土遺物 (第10・11図、図版5・6)

包含層から出土した遺物には須恵器と土師器があり、その分布は、主に造構が集中して検出されたX 8～10Y24～38区にかさなる。器種別では、須恵器杯B(12・13)・杯B蓋(14)・杯A(15)・壺蓋(16)・壺(17)・長頭瓶(18)、土師器杯(19～24)・皿(25)がある。12は器高が高く大振りで、高台は低く、底部は回転ヘラ切り。13は底部と体部の境が角張り、高台は低く、底部は回転ヘラ切り。14は内面に墨痕と磨り面が残る転用碗である。高さが低く、口縁端部を丸くおさめる。15は体部外側上方に立ち上がり、底部と体部の境が角張り、底部は回転ヘラ切り。16は擬宝珠のつまみをもつ壺蓋で、頂部外面に自然釉と窯壁の付着が見られる。17は口縁が大きく外反しながら立ち上がる大壺で、口縁帯をもち、口縁外面に波状文を装飾する。時期は8世紀後半代であろうか。18は長頭瓶で、底部は丸底に仕上げられた後、高台を貼り付けている。19は体部が内湾気味に立ち上がり、底部は回転糸切り無調整。20は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁は僅かに外傾し、底部は回転糸切り無調整。21～23は墨書き土器で、21は体部外面、22・23は底部外面に墨書きが認められる。24は杯の体部片で、外面に墨痕が付着している。25は無台皿で、底部は回転糸切り無調整。時期は10世紀初頭と思われる。

(3) その他の出土遺物 (第11図、図版5)

基本層序のV層上端から、寛永通宝銅錢が1点(26)出土している。計測値は外径22mm、厚さ1.1mm、重量1.57gである。文字形態の特徴から、元文期に鋳造されたものと考えられ、この時期の寛永通宝は產銭量の減少から小型・軽量となり、径や重量の計測値も該期の特徴と一致している。

本期の銭岸は、「三貨図鑑」・「銭錄」・「寛永錢譜」などに記載があり、鋳造年代は元文元(1736)年から延享2(1745)年頃と推定される。

IV 自然科学分析

豊穴住居跡出土炭化材のAMS法による放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

小林絆一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani

1. はじめに

砂子田 I 遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調整データは表2のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、曆年代を算出した。

表2 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-4068	遺跡：ST01 層位：廃土 その他：採集170520	試料の種類：炭化物・材 試料の性状：最外以外年輪 状態：wet カビ：無	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸12N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸12N)	PalooLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH

3. 結果

表3に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行った¹⁴C年代、¹⁴C年代を曆年代に較正した年代を、図1に曆年較正結果をそれぞれ示す。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

表3 放射性炭素年代測定及び曆年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を曆年代に較正した年代範囲	
			1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
PLD-4068	-27.71 \pm 0.14	1205 \pm 25	775AD(42.6%)830AD 835AD(25.6%)870AD	720AD(4.9%)750AD 760AD(90.5%)890AD

なお、曆年較正の詳細は以下の通りである。

曆年較正

曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正することである。

¹⁴C年代の曆年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1 σ 曆年代

範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

調査の知見では、9世紀後半と予想されているが、測定結果は、1 σ 統計誤差において8世紀後半～9世紀前半、2 σ 統計誤差において8世紀中頃～9世紀後半である。

木材試料の場合、最外年輪が伐採年代を示し住居構築時の年代を示すと考えられる。測定試料は、堅穴住居跡覆土を水洗して回収した炭化材片であり最外年輪以外の年輪部分を測定している。このことは、伐採年代以前の年代値を示している可能性が高く、測定された年代値が予想より古いものと考えられる。

なお、測定精度は±25年と良いものの、較正曲線が傾斜のない平坦部に対応しているため（図1参照）、暦年の年代幅が広いものとなった。

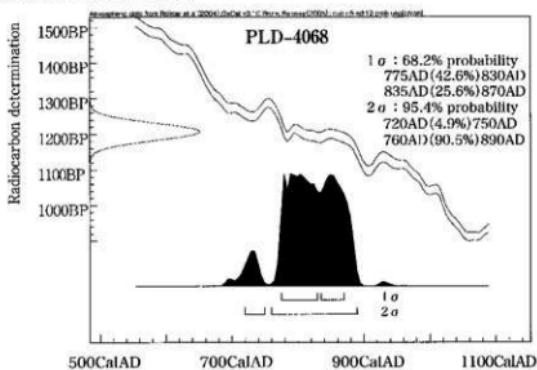


図1 暦年較正結果

参考文献

- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program
Radiocarbon 37(2) 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001, Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon*, 43 (2A) 355-363
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代, p.3-20
- Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmeli, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. 2004 *Radiocarbon* 46:1029-1058.

V. 総括

今回の発掘調査区は、砂子田Ⅰ遺跡の北西地点にあたり、平成16年度調査区の南側に位置している。調査の結果、奈良・平安時代の堅穴住居跡1棟、土坑20基、ピット10基、溝1条と、近代の溝2条を検出した。遺物の年代は9世紀代～10世紀初頭と考えられ、その多くは遺物包含層（V層）から出土している。遺構・遺物の分布状況は、比較的地盤が安定した調査区中央以西に集中し、それ以東の湧水が著しい地区では溝2条のみであった。

SI01はカマドや柱穴が確認されなかったものの、遺構周辺にカマドの構築材と思しき川原石が散見されたことや、その検出状況から堅穴住居跡として取り扱った。遺物は須恵器（1～5）と土師器（6）が出土している。時期は10世紀初頭（池野 1988）と思われるが、覆土中の炭化材について、AMS法による放射性炭素年代測定を実施した結果では、 1σ 統計誤差において8世紀後半～9世紀前半、 2σ 統計誤差において8世紀中頃～9世紀後半との年代が示された。ただし、測定資料が最外年輪以外の部位であることから伐採年代以前の年代を示し、この年代値が予想より古い可能性を示唆している（IV章 自然科学分析）。また、ピットの多くは柱穴状であるものの、明瞭な配列を追うことはできなかったが、P01～02とP02～03の距離が2.65mと等しいことから、P01～03は掘立柱建物の一部を構成する可能性がある。

この様な状況から当地区は、これまでに行われた周辺調査地に続く、古代集落跡の一部であることが判明した。平成16年度調査の報告（鍋中町教委 2005）では、溝、土坑、ピット群が耕作に伴うものと仮定した場合、その耕作地の縁辺部に堅穴住居や掘立柱建物が点在している可能性が示されている。今回の調査によって、この集落形態を知るうえで新たな資料が補足された。
(桐谷)

参考文献

- 池野正男 1987 「射水丘陵における8世紀後半の須恵器窯跡」『大境』 第11号 富山考古学会
池野正男 1988 「射水丘陵における9・10世紀の須恵器窯跡」『大境』 第12号 富山考古学会
池野正男 1992 「越中における須恵器生産の終焉」『北陸古代土器研究』 第2号 北陸古代土器研究会
池野正男 1997 「越中における9世紀代の土器様相」『北陸古代土器研究』 第6号 北陸古代土器研究会
川根正孝・石川功・横木真吾 2005 「寛永通宝銅錢の形態的特長と金属性成分分析」『日本考古学』 第20号 日本考古学協会
財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 2005 「中名V・VI遺跡、砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告」
富山市教育委員会 2002 「富山市橋谷南遺跡発掘調査報告書Ⅰ」
富山市教育委員会 2003 「富山市開ヶ丘中道跡 開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書」
富山市教育委員会 2005 「富山市願海寺城跡発掘調査報告書」
鍋中町教育委員会 2004 「富山県鍋中町砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告書」
鍋中町教育委員会 2005 「富山県鍋中町砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告書Ⅱ」

表4 ピット規模一覧表

遺物番号	位置	平面形状	計測値(cm)			土質	備考
			長軸	短軸	深さ		
P01	X18Y22	円形	30	28	21	灰オリーブ色シルト	柱穴の可能性有り
P02	X17Y23	円形	28	27	16	灰オリーブ色シルト	柱穴の可能性有り
P03	X16Y24	円形	27	25	17	灰オリーブ色シルト	柱穴の可能性有り
P04	X17Y24	円形	28	26	14	灰オリーブ色シルト	
P05	X16Y24	円形	25	21	12	オリーブ黒色シルト	地山少量混
P06	X17Y25	円形	23	19	15	灰オリーブ色シルト	
P07	X 9Y30	椭円形	43	28	8	灰オリーブ色シルト	
P08	X 9Y31	略円形	20	19	11	灰オリーブ色シルト	
P09	X 8Y32	円形	21	20	20	灰オリーブ色シルト	
P10	X 8Y38	円形	30	28	20	灰オリーブ色シルト	上部器窓が出土

表5 土器觀察表

遺物番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	計測値(cm)			胎土	色調	備考
					口径	底径	器高			
1 SI01	覆土	須恵器	杯	B	121	5.7	5.5	白色粘物粒、 黒色粒極少量、精良	灰白	
2 SI01	覆土	須恵器	杯	B 壺	(18.7)	—	—	白色粒、白色繊維少量 黒色粒	灰白	転用鏡、墨痕あり
3 SI01	覆土	須恵器	杯	A	(12.3)	—	3.9	白色粒、黒色粒極少量 精良	灰白	
4 SI01	覆土	須恵器	杯	A	(11.5)	(5.0)	3.1	白色粒、白色粘物粒	灰白	
5 SI01	覆土	須恵器	短頸壺		(11.8)	—	—	黒色粒	灰白	内外面に自然釉
6 SI01	覆土	十輪器	壺		(16.4)	(8.0)	4.0	細砂粒多量	淡黄橙	補修痕あり
7 SK05	覆土	須恵器	壺		—	—	—	黒色粒少量 精良	灰白	
8 SK09	覆土	須恵器	杯	B 壺	(14.6)	—	—	白色粒、灰色粒	灰白	
9 SK18	覆土	須恵器	杯	B 直	14.7	—	3.0	白色粒、灰色粘物粒	灰白	つまみ付
11 P10	覆土	土師器	壺		(11.2)	—	—	暗赤褐色粒	にぶい黄橙	
12 X9Y34	V層	須恵器	杯	B	15.2	7.4	6.7	白色粒、灰色粒、黒色粒	灰白	
13 X9Y34	V層	須恵器	杯	B	(10.2)	6.9	4.3	白色粘物小粒極少量 灰色粒	灰白	
14 X9Y32	V層	須恵器	杯	B 直	(15.6)	—	—	灰色粒、灰色粘物粒 白色軟質粒	灰	転用鏡
15 X10Y33	V層	須恵器	杯	A	11.2	7.0	3.4	白色粘物粒少量	灰白	
16 X9Y33	V層	須恵器	壺		10.8	—	5.0	黒色小粒	灰白	外面に自然釉 外面に窯墨が付着
17 X10Y36	V層	須恵器	壺		(54.8)	—	—	灰色・白色粘物小粒少量	灰	
18 X10Y32	V層	須恵器	長颈瓶		—	8.7	—	白色小粒、黒色粒少量	灰	
19 X9Y33	V層	十輪器	杯		(11.8)	5.9	4.1	灰色粘物粒極少量	灰白	
20 X9Y32	V層	土師器	杯		12.5	5.8	4.2	灰色・白色粘物粒極少量	灰白	回転時計回り
21 X10Y29	V層	十輪器	杯		(13.0)	—	—	砂粒少量	灰白	体部外面に墨書 にぶい橙(赤彩)
22 X9Y40	V層	土師器	杯		—	—	—	鐵砂粒	にぶい橙	底部外面に墨書
23 X8Y23	V層	土師器	杯		—	—	—	砂粒少量	淡黄橙(赤彩)	底部外面に墨書 内外面に赤彩
24 X8Y23	V層	土師器	杯		—	—	—	鐵砂粒	淡黄	体部外面に墨書
25 X9Y38	V層	土師器	壺		(13.6)	(6.0)	2.3	赤褐色粒	灰白	

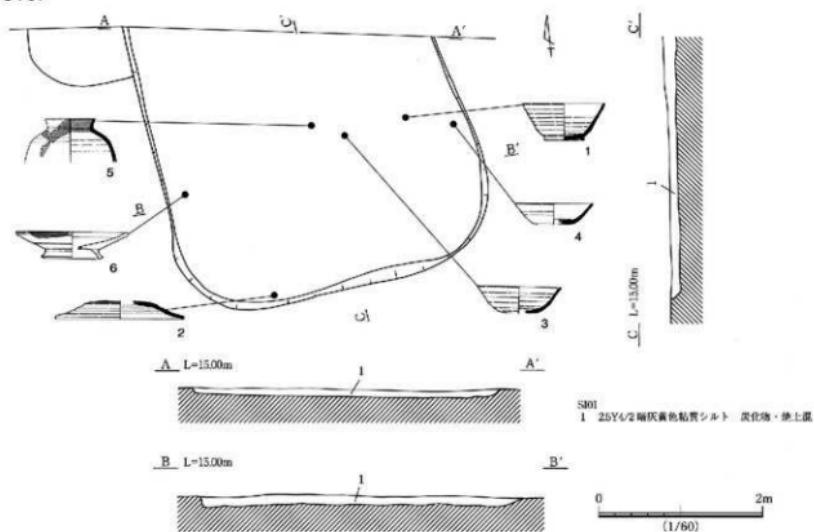
表6 土製品觀察表

遺物番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	色調
10	SK18	覆土	上製品	土壺	3.5	6.2	1.2	72	灰青

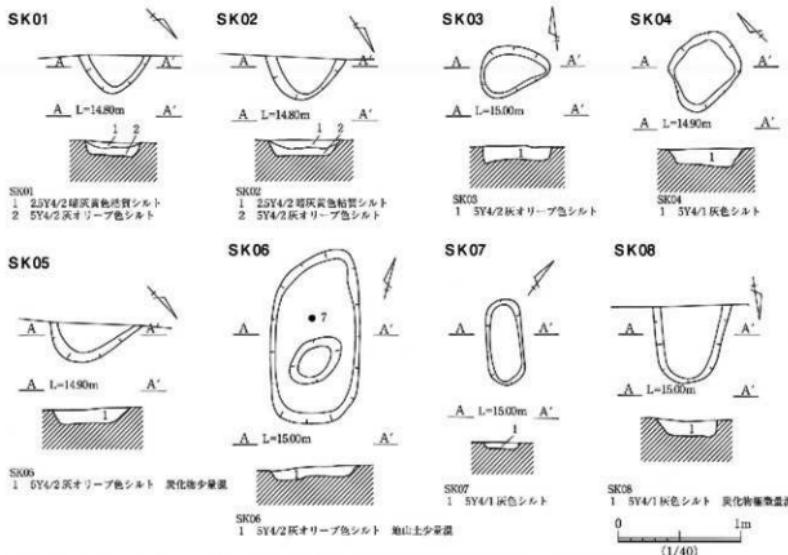
表7 錢貨觀察表

遺物番号	出土遺構	出土層位	錢貨名	材質	外径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	鑄造年代(年)	備考
26	X9Y32	V層	寛永通宝	銅	22	1.1	1.57	1736~1745	完形

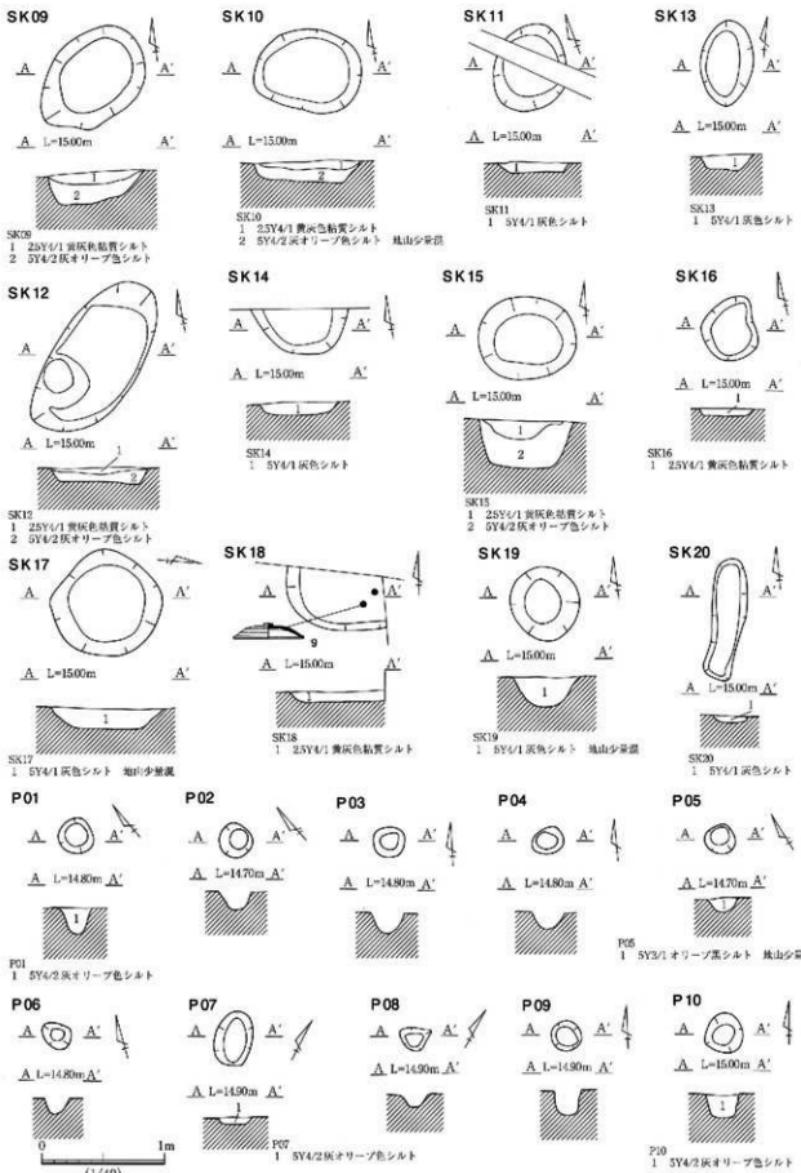
SI01



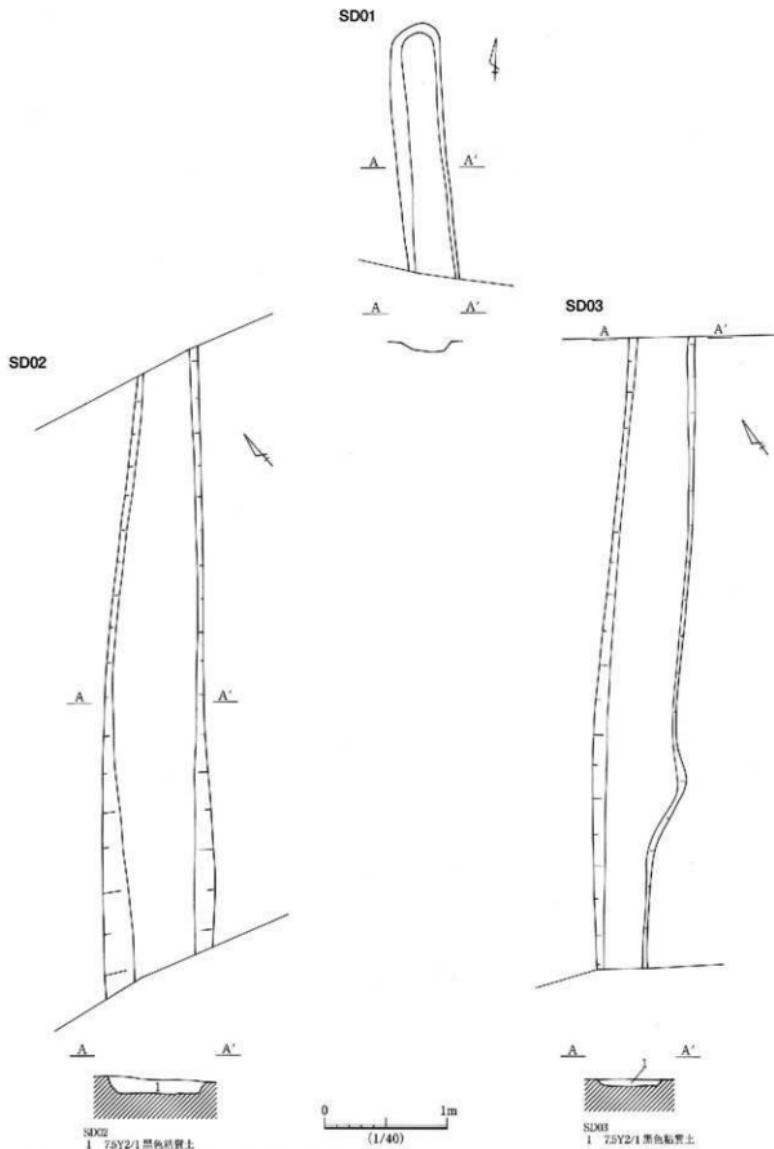
SK01



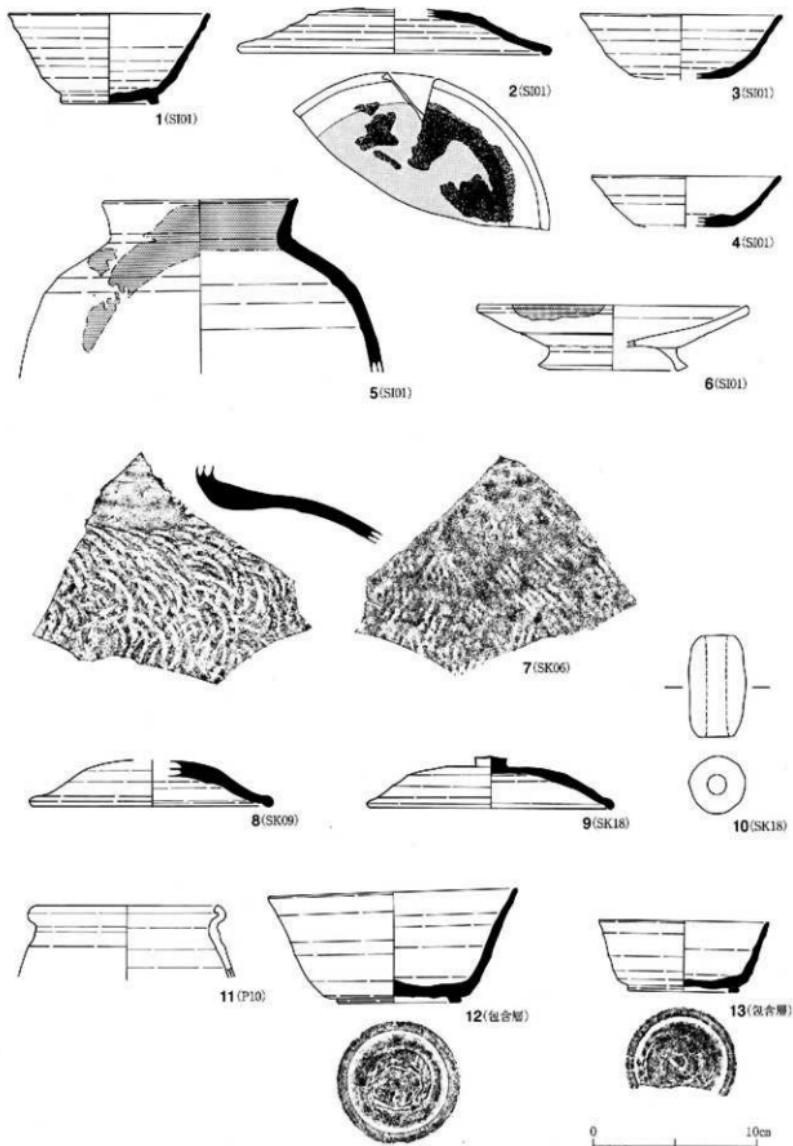
第7図 SI01、SK01～08 遺構平面図及び断面図 (SI01は1/60、他は1/40)



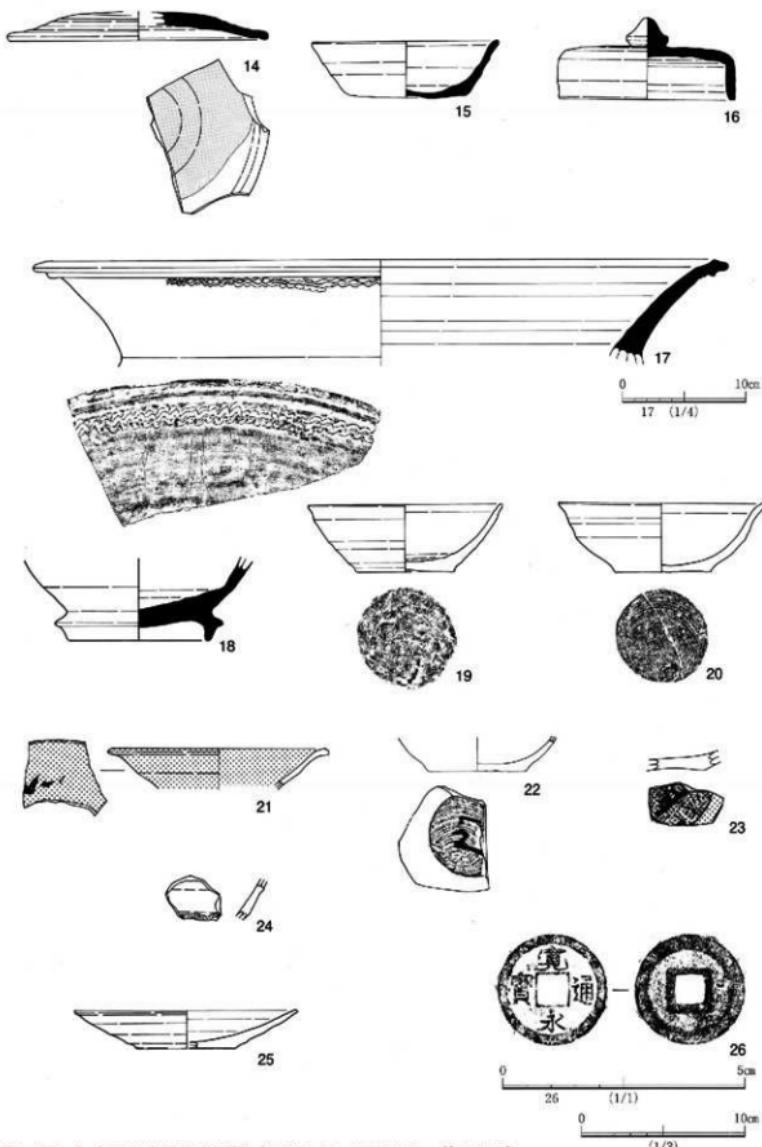
第8図 SK09～20、P01～10 遺構平面図及び断面図 (1/40)



第9図 SD01～03 遺構平面図及び断面図 (1/40)



第10図 SI01、SK06・09・18、P10、包含層出土遺物実測図 (1/3)



第11図 包含層出土遺物実測図 (17は1/4、26は1/1、他は1/3)

図版1(遺構)

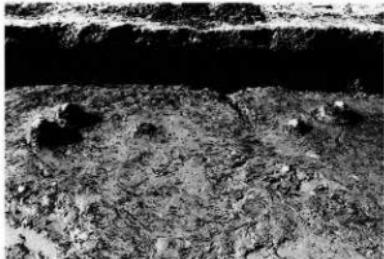


X14~18 Y22~26区全景(東から)

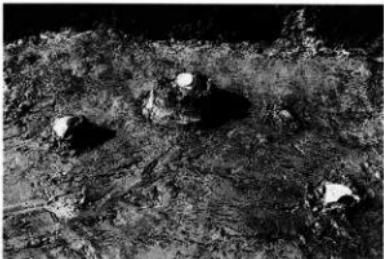


X8~12 Y29~38区全景(西から)

図版2(遺構)



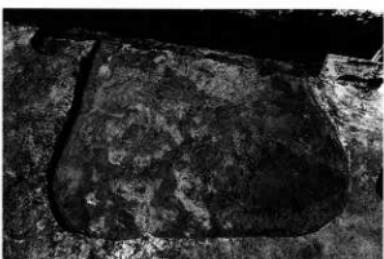
包含層遺物出土状況（南から）



包含層遺物出土状況（南から）



SI01 遺物出土状況（西から）



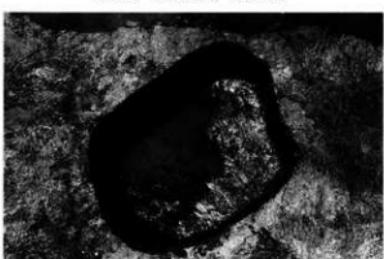
SI01 完掘状況（南から）



SK02 完掘状況（西から）



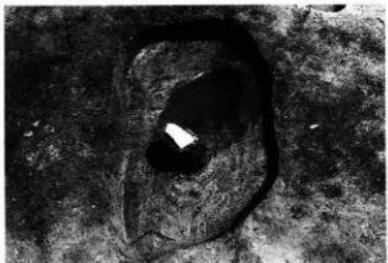
SK03 完掘状況（東から）



SK04 完掘状況（北から）



SK05 完掘状況（南から）



SK06 遺物出土状況（北から）



SK07 完掘状況（西から）



SK08 完掘状況（西から）



SK10 完掘状況（南から）



SK11 完掘状況（北から）



SK12 完掘状況（南から）



SK14 完掘状況（北から）



SK15 完掘状況（南から）

図版4(遺構)



SK16 完掘状況（南から）



SK18 遺物出土状況（北から）



SK19 完掘状況（南から）



P-9 完掘状況（南から）



P10 完掘状況（北から）



SD01 完掘状況（南から）

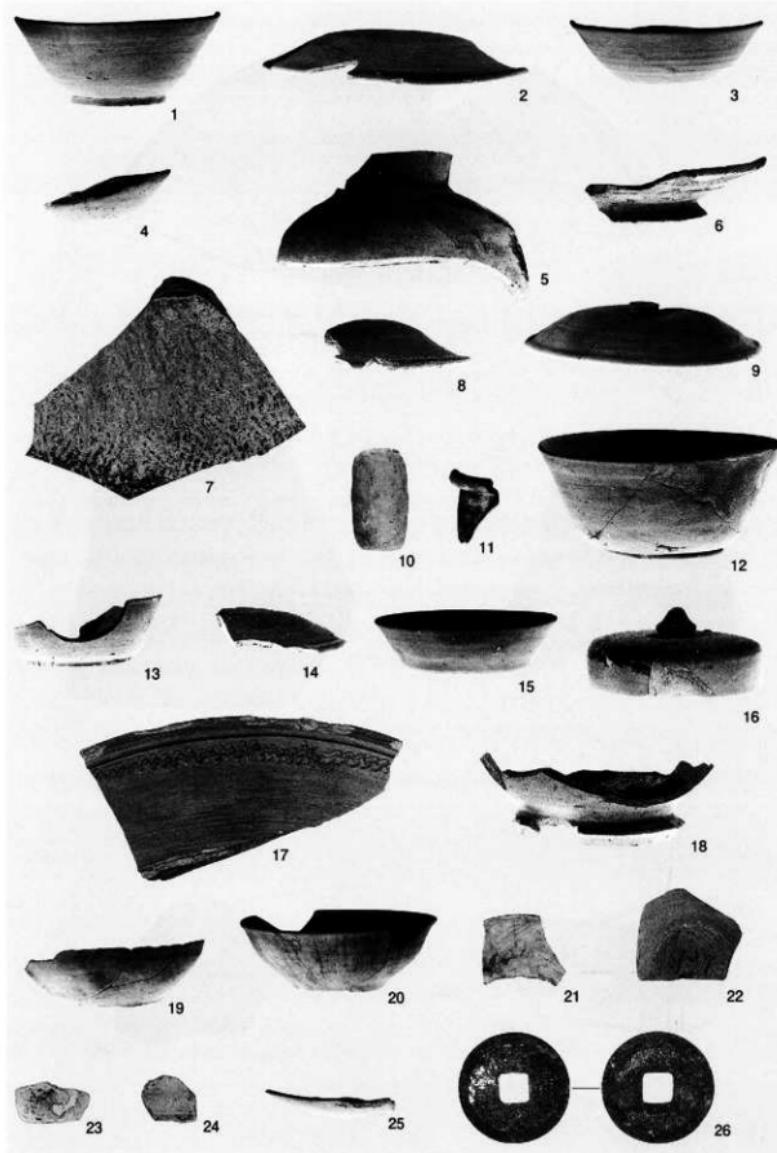


SD03 完掘状況（南から）

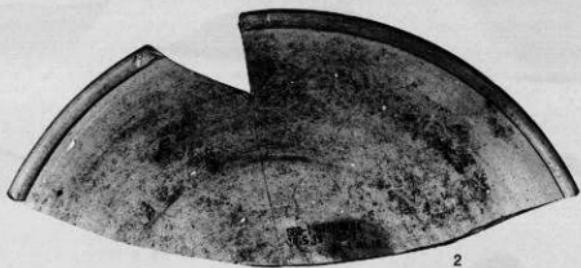


X2~12Y40~57 区全景（東から）

図版5(遺物)



図版6(墨書き器・転用硯)



2



21



22



23



24

報告書抄録

ふりがな	とやましすなごだいちいせきはつくつちょうさほうこくしょ						
書名	富山市砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告書						
副書名	砂子田地内宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	3						
編著者名	桐谷 優、黒岩拓也、古川知明						
編集機関	山武考古学研究所						
所在地	〒286-0045 千葉県成田市並木町221番地 TEL0476-24-0536						
発行機関	富山市教育委員会(埋蔵文化財センター)						
所在地	〒930-0809 富山県富山市愛宕町一丁目2-24番 TEL076-442-4216						
発行年月	西暦2005年11月30日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
砂子田Ⅰ遺跡	富山市婦中町 砂子田	山町村 162019	36度 39分 00秒	137度 09分 30秒	20050511 ～ 20050524	398 m ²	砂子田地内宅地造成 に係る事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
砂子田Ⅰ遺跡	集落	古代	住居跡 土坑 ビット 溝	1棟 20基 10基 1条	土師器・須恵器 十鉢	横書き土器3点と転用硯2点が出土した。墨書き文字はいずれも不明瞭で判読はできない。転用硯2点は須恵器杯蓋で、顯著な使用痕が見られる。	
要約	今回の調査区は、砂子田Ⅰ遺跡の北西部に当たる場所である。調査の結果、古代の堅穴住居跡、土坑、溝、ビット群が検出され、当地区が古代集落の一部であることが確認された。ビット群の一部は、その形状や配列から掘立柱建築跡の一部を構成するものと考えられるが詳細は不明である。出土した遺物は古代の須恵器と土師器が大半であり、その他では覚永通宝(1736～1745年)が1点であった。堅穴住居跡の覆土中から炭化材片が検出されたため、AMS法による放射性年代測定を実施した。その結果、 1σ 統計誤差において8世紀後半～9世紀前半、 2σ 統計誤差において8世紀中期～9世紀後半との年代が示され、上器による年代範囲とも概ね符合している。ただし、測定資料が最外年輪以外の部位であることから伐採年代以前の年代値を示し、この年代値が予想より古い可能性を示唆している。						

富山市砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告書
発行日 平成17年11月30日
編集 山武考古学研究所 千葉県成田市並木町221
発行 富山市教育委員会 富山市愛宕町一丁目2-24
印刷 株式会社文化総合企画

